

日本の近代土木遺産 渓谷で1世紀耐える

まつむろ 松室大橋



明治35年(1902)山陽本線開通。その3年後に徳山海軍練炭製造所が設置され、大正6年(1917)造船・造機の工場建設、同7年に日本曹達が建設されるなど、周南地域の社会経済構造は転換期を迎えていました。

こうしたなか山口県は低価格な電力を供給して県内産業の発展を図るため、錦川での電気事業の企画・調査に取り掛かっていました。大正9年12月「錦川の水を利用して県営電気事業を企画経営せむことを建議す」と山口県議会は満場一致で採択後、山口県は錦川水利使用出願に関する提案を行い、議会の可決を得たのでした。こうして大正11年6月都濃郡須金村(現・周南市)でトンネル工事が着工され、山口県による県営電気事業第1号の錦川第一発電所の歴史が始まったのでした。

大正13年12月4日錦川第一発電所の竣工式と同時に第二発電所の起工式が行われ、その後も県営電気による新設や他事業者の買収、出力の増加等で、当初の低価格な電力供給は実現されていきました。昭和17年の山口県電気局の解散時には13発電所でしたが、錦川第一・第二は主力発電所でした。

菅野ダムから国道434号を少し走り、視界が開けたところで錦川第一発電所と赤い鋼橋が見えます。これが近代土木遺産の松室大橋です。長さ41.5m、幅員4.1mで下路曲弦ポニーワーレントラスの橋は、プラットトラスに比べて剛性が大きく、鋼材料も少なくてすむ利点があります。また上横構がないため、輸送荷物の高さ制限も不要です。

数年前まであった「大正9年11月、日本橋梁株式会社製作」の銘板が物語るように、建設されたままの位置で現役橋梁は、日本で2番目に古いものです。

発電所工事用の材料を載せた車がこの橋を通ったことを思うとき、周南地域の産業発展に寄与した錦川第一発電所とともにその功績は計り知れないと思われま。今日のような質の高い材料や高度な技術がない時代に造られた橋が1世紀の間風雪に耐える様をみると、先人の叡智に頭がさがります。

■位置図



松室大橋 下路単線曲弦ワーレントラス (橋長41.5m 幅員4.1m)



建設された位置で現存する鋼単純トラス橋では日本で2番目に古い



国道434号から見る錦川第一発電所と松室大橋